着ぐるみ

ミルメコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
着ぐるみ

【Ｎコード】
Ｎ０４７６Ｈ

【作者名】
ミルメコ

【あらすじ】
着ぐるみ世界に入った少女の話。
アリスパロですが結構違ったりするかもしれないです。

カメレオンと少女

その世界の住人は、皆着ぐるみだった。中に何が入っているのかは分からない。彼らはみんな鏡に映っているだけだから。その着ぐるみを剥ぐことはできなかった。

ある日、わたしは鏡の中に入ることができた。その日は時空がぶれる日だったからだ。

わたしはテーブルの上のぶどうをつまんだ。酸っぱい味がした。カメレオンがこちらを見て笑った。

「そのぶどうは酸っぱいだろう」

わたしはうなずいた。

二つ頭のうさぎがフラフープを回しながらやってきた。

「こっちの口で食べると酸っぱいけど」

「こっちの口で食べると甘いのよ」

片方の頭ずつぶどうの粒を食べた。

「でもわたし、口は一つしかないの」

「じゃあ造ればいいさ」

魚がきた。

「お前の鰭でいったい何が造れるというんだ。ばか」

カメレオンは魚が嫌いだ。

「誰が俺が造ると言ったんだ？」

「誰も」とうさぎ。

「もういかなくちゃならないわ」

わたしは言った。さっきから髪が空気に引っ張られている。

カメレオンはトランプの中の絵を引っ張り出した。わたしの方に絵が覆いかぶさってきた。

其処にはたくさんのアルコール漬が置いてあった。怖いような嬉

しいような気分になった。色素の抜けたそれらが此方を見た。
「名前は？」
真っ白なかえるは妙にえらそうだった。
「林檎、貴方は？」
「教えない」
「じゃあ別にいいわ」
わたしはたずねた。
「なんで標本なのに話せるの」「中身までアルコールが染み込んじゃいない。これだって所詮着ぐるみなんだ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0476h/

着ぐるみ

2010年10月16日14時08分発行